

シモーヌ・ヴェーユの哲学とは何か〔補〕

Qu'est-ce que la philosophie de Simone Weil

村上吉男

Yoshio Murakami

1909年パリの、ユダヤ系フランス人医師の家庭に生まれ、自由で知的雰囲気
に満ちた、めぐまれた環境に育ちながらも、兄アンドレの並外れた資質に比べ、
自らの能力の凡庸さに死を意識せずにはおれない、14歳のときの暗夜を乗り越
えては、当時の女性の生き方としてまれとみてよい、教育の最高機関たる高等
師範学校に進学し、のちに、女子高等中学の哲学教師という天職を得て生計を
立てるなか、労働組合組織や失業者救済運動に加わるだけか、女工の生活を
し、さらにスペイン市民戦争に参加したり、その静養のため、工場体験後には
ポルトガルを、かの戦地での負傷後にはアジヤソレムを旅し、各地にあって
キリスト教に興味を抱き、とりわけソレム修道院でキリストの啓示を受けたり
する一方で、ヒトラーによる、迫りくる戦火と反ユダヤ主義のもと、パリより
アメリカへの脱出を余儀なくされ、途中マルセーユに立ち寄って、当地のドミ
ニコ会修道院長ペランに、その周辺に住んでいた農民哲学者ティボンや詩人ブ
スケに出会うなどしてから、両親や兄とともに客船でニューヨークに渡るにし
る、占領された祖国の人たちの不幸を感じては、脱出を悔み、ほぼ数カ月滞在
後、アンリ四世高等中学の同級生シューマンのおかげで、祖国を真近かに見届
けられるイギリスは一人貨物船に乗ってリヴァプールへと、次いでロンドンへ
と到着し、そこでド・ゴールによって指揮された自由フランス政府の一部門に
配属させられ、自身祖国潜入の機を窺うが、組織に容れられず、しかして、す
でに心身の衰弱はなほだしく、療養につとめど、戦禍で食べずにいる子供たち
を思っか、食物の拒否も災いして、ついに1943年、異郷の地にて逝ったシモ
ヌ・ヴェーユ。

34歳の若さで閉じた、ヴェーユの〈生の現実〉は自ら語る通り、〈感覚 (sensation)〉ではなく、〈思惟 (pensée)〉と〈行動 (action)〉である〈活動 (activité)〉にあったと捉えられる¹⁾。彼女が〈活動〉の一方の〈思惟〉を、カール・マルクス思想、当時の、マルキシズム、トロツキズム、サンディカリズムやアナキズムの吸収に、またキリスト教思想、その異端思想や異教思想の、さらに政治学、経済学、社会学、印欧言語学、歴史学、心理学や生理学の吸収に、そして古今東西の、プラトン、アリストテレス、ルネ・デカルトや、ブレーズ・パスカル以来の実存主義、鈴木大拙などをはじめとする哲学者、宗教者と科学者たちの各思想の吸収に向かわせたことはその証しであり、短い生涯で、自らにこうした博覧強記を課したことは筆者には驚き以外の何ものでもなくなる。

しかし、〈活動〉が〈思惟〉のみか、同時に他方の〈行動〉をも取り込んで語られるにあって、ヴェーユは数知れぬ思想に〈思惟する²⁾〉を課してもたらされた〈思惟〉を、筆者が動の行動と名付ける、この〈行動〉といかにかかわらせていたか。要は〈思惟〉はこれも筆者に、〈思惟する〉に対し〈能動〉の意味をもたせるべく、静の行動と名付けられるところに関与して生み出される〈受動〉能力と理解させられるにしる、〈思惟する〉「静の行動」は彼女に〈脳〉全体をさしていわれよう〈魂 (âme)〉中の、〈精神 (esprit)〉内で働きかける運動である³⁾ほかなく、〈行動〉がその〈魂〉を除いた、他の身体⁴⁾で、彼女にあの工場労働やティボンのもとの農業労働に駆り立たせたように、何より身体を動かす〈能動〉運動なる「動の行動」を示すのとは異なってみえるのだから、彼女のいう〈思惟〉と〈行動〉が関係すると捉えられるならば、彼女はいかなる関係を保有させて語るかである。たとえば、彼女が『資本論』をはじめとしたマルクス思想を読み込み、賛否を交えて獲得された〈思惟〉をして、彼女の身を労働運動に投じる〈行動〉を起こさせる関係を強調することにあるのか。そうであれば、彼女は〈行動〉でこの〈思惟〉を確認する、新たな〈思惟〉を生み出すにすぎず、その関係は〈思惟〉が〈行動〉を要求するだけで、〈行動〉が〈思惟〉に勝る関係にはなくなる。ただ〈行動〉を優先させたからとはいえ、〈行動〉の起爆剤は〈思惟〉に基づくのではない。かつ彼女にいう〈行動〉は少なくともある目的を〈思惟〉で見定め、現実にするための、日常用いる〈行動〉の

意味ではない。だから筆者は彼女を、人々にいかような〈活動〉家に見立てられども、〈思惟〉すなわち思想に依拠し、〈行動〉に走るマルキシストと呼ばせる相貌をばかりか、ほかにコミュニスト、トロツキスト、サンディカリストやアナキストの相貌をもって、またおよそ同様な理由から、キリスト教徒、神学者、神秘主義者やシンクレティストの、さらに実存主義者や自由主義思想家の、はてはファシストの相貌をもって語ることができないと知るわけである。

ヴェーユは先哲や同時代人の諸思想に影響されて自らの〈思惟〉のほとんどを導き出しつつ、いわばこの〈思惟〉に従うかして〈行動〉しよう関係を是認ばしていたのではない。その通りである。そこで筆者はここに、〈思惟〉と〈行動〉の関係がむしろ〈行動〉を主にした関係にあると明かしたり、さらに彼女が哲学教師である以上、哲学として質されたりせねばならぬことをねらいにすると、それで彼女の相貌に関してなおもいえば、哲学者以外に当てはまらないことを周知させると宣すれど、そうしたねらいや周知を告げる作品が彼女にみつけられるかである。これを証左し得る一例に、筆者は『哲学講義』を取り上げることができる。そこには先哲の思想（哲学）を生徒たちに、万遍無く網羅してというよりか、学士論文以来すでに持ち合わせていた、彼女自身の哲学的主張を中心に選択し教える姿勢がみられるからである。哲学的主張とは筆者にいわせるまでもなく、〈思惟〉と〈行動〉の関係が哲学になる、まさにその中心に位置づけられるのであって、しかも哲学的主張を独自と語らせるかぎり、それははや『デカルトにおける科学と知覚』と題された学士論文に打ち出されていたとみることでなければならない。

とまれ〈思惟〉と〈行動〉の関係に起因し生じる、ヴェーユ独自の哲学は、学士論文にはじまり形成されていくと見て取るにせよ、彼女がなぜ、デカルトを研究対象にしたかに、あわせて『科学と知覚』と題したのかに答えおかねば、哲学的主張を学士論文に窺い得るとの、筆者の捉え方は否定されるにちがひなからう。近代哲学の始祖とされ、今も斯界の名だたる哲学者として君臨するデカルトを、彼女が問題にしたのは、デカルトに関心を抱いていたとされる、まずは、アンリ四世高等中学の師アランからの影響か、次に、彼女の学士論文の指導者がシモーヌ・ド・ボーヴォワールと同じブランシュヴィックであり、ソ

ルボンヌ大学でのその教授の影響によるかと尋ねるよりも、筆者には彼女がデカルトのいう『科学と知覚』に焦点をば当てることで自らの哲学的主張（彼女独自の哲学）を語るに適うことであつたと推察できるからである。それに彼女が学士論文でデカルト哲学をまとめ上げるばかりか、批評したことは筆者に、フランス文化に、延いてはヨーロッパ文明に何をいわしめるかまで知らしめども、要はかの哲学的主張の支えなしに不可能であつたと断じられる。そこで〈思惟〉と〈行動〉の関係に関する、哲学的主張を学士論文から引き出さんとすれば、筆者は哲学的主張である、この関係を築く一方の語〈行動〉に、つまり筆者の指摘した、身体を動かす「動の行動」に、デカルトのいかなる作品にも見出し得ない〈感受性 (sensibilité)〉の語を〈行動 (動の行動)〉からもたらされる能力として重ね合わせて捉え得ようがゆえに、この〈受動〉能力〈感受性〉を抜き出し、明らかにさせていかねばならなくなる。

ヴェーユは学士論文で自ら掲げた主題『科学と知覚』を論じつつ、そのなかに『知覚』としての、彼女のいう〈感受性〉を挿入させるが、しかし筆者にすれば、この主題こそデカルトにおける、〈思惟〉と〈行動〉に、とどのつまり精神と身体に充当し得ると察知されよう。なぜなら彼にあって、『科学』は当然精神の〈思惟〉あるいは〈思惟〉をもたらず知性（理性）が、『知覚』は精神にかかわって語られる語であるにせよ、それ以前にまず身体の〈行動〉あるいは身体を動かす〈行動〉に従い生じる感覚がそれぞれ原動力になるとみられるからである。ここに『科学と知覚』が各「知性（理性）と感覚」に当てはまるといえる以上、「知性（理性）と感覚」（もしくは「精神と身体」）の関係はまた、〈思惟〉と〈行動〉の関係を問うことでしかなくなる。こうした関係がどうあるかは、これらの能力による知る作用とそのしくみを明らかにできる認識論に委ねるほかない。それゆえ筆者は、彼女が学士論文にてデカルトの認識論を、これに合わせて彼女自らの認識論を語るといわねばならぬことになる。周知のように、彼はコギト (je pense) にはじまる認識論を展開し、思惟する (penser) 間、スム (je suis) するという存在論に結びつかせ、いかに存在する (être) か、さらにいかに存在して文化や文明に寄与するかにおいて、倫理 (学) を修め、学問 (科学) を発展せしめる実践を説いた。これすなわちデカルトの哲学である。

他方筆者は、ヴェーユの哲学的主張である、〈思惟〉と〈行動〉を、彼女が

〈脳〉全体をさしている〈魂〉中の〈精神〉で「静の行動」をして〈思惟〉を可能ならしめる「知性（理性）」と、何よりもまず身体で「動の行動」たる〈行動〉から生み出される〈感受性〉とにいい換え得るとみるとともに、「知性（理性）」からの〈思惟〉と〈行動〉からの〈感受性〉の関係をデカルトで記したことに倣い質すならば、これらの能力による認識論もなくはならないし、この認識論に立った存在論や実践論さえあってしかるべきであると推察する。それらを明かし得るならば、それは彼女の哲学になろう。学士論文に彼女の哲学、とりわけ認識論も語られるとき、認識論は筆者にデカルトの諸作品に記されくる、〈能動〉能力〈感じる（ressentirとsentir）〉やその各〈受動〉能力〈感覚（sensとsentiment）〉の各語のうち、彼女の場合、〈能動〉能力の語をばそのまま使用するが、〈受動〉能力の語の方を「感覚」でなしに、〈感受性〉に入れ替えて、「知性（理性）」からの〈思惟〉と〈行動（感じる）〉からの〈感受性〉の関係をかたちづくるように捉えさせる。しかも、デカルトにいう認識論にはいわゆる《真理の探求》だけではない、複数の用法がみられると彼女に指摘される学士論文で、彼女がむろん、彼が各用法に亘る各「感覚」を明かしたことを説くほか、彼女自らにみる「感覚」をも〈感受性〉とともに、一用法で成る認識論に組み入れ、彼女なりの認識論を明示したことを強調させたいがゆえに、デカルトやイマヌエル・カントがそれぞれでいう感覚や感性（Sinnlichkeit）と相違して理解されよう、この〈感受性〉こそ彼女の認識論を、哲学を独自にする。さらに独自とは筆者に、認識論がすなわち存在論すなわち実践論を含んでいう、彼女の哲学にあると予想されたし、これについてはすでに語ったところである⁶⁾。

21歳時のヴェーユが〈感受性〉という、独自の語を学士論文に記していたことで、筆者はそこに彼女の哲学が生じくと断じるにしろ、学士論文で完成するとみてはならない。学士論文を書き上げた以降、死を迎えるまでのおよそ10数年間にあって、彼女には、作品と呼び得る著作が戦後フランスのあるべき姿を究明した『根をもつこと』以外になく、他は膨大な量に達する、社会情勢（動向）ならびにギリシアやキリスト教に関する雑誌投稿論文、草稿、随想、書簡、ノートと、詩、戯曲や生徒たちに書き留められた、『哲学講義』をはじめとする講義録などが残されるだけであった。筆者にとっては作品とみなしてかまわ

ぬ、学士論文を含めた、その都度の書き物に語られたことは、デカルトを筆頭にする先哲が、または同時代人が述べた、哲学的諸思想、政治、経済、社会的諸思想、宗教的諸思想への、さらには彼女の生きた時代に至る、科学技術に支えられた文化、文明への各批評である。

ヴェーユがその生涯にあつて、何時頃から先哲や同時代人の諸思想に出会いはじめたかは定かにできないにせよ、筆者が学士論文を参照するとき、そこには彼女がそれまで学んだと察知される諸思想をば、いわばデカルト哲学に集約させて、要は彼の哲学に代表させて批評していたと読むことが可能である。だから諸思想の批評も当然デカルト哲学をあらわすなかで成ると読む。およそ学士論文を書き上げた学生時代の彼女は、筆者には、もっぱら〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉で、デカルトをはじめとする先哲の、またはロマン・ロランやジャン＝ポール・サルトルなどの同時代人の諸思想に各正當か否かを質した批評を試みた時間の方が、ときに自らにサンディカリズムやマルキシズムにも興味を覚えては、〈行動〉すなわち「動の行動」である、こうした労働運動に加担していたとされることに比べ、はるかに多く費やされたようにみえる。

ところが22歳で高等師範学校を終えて以後、ヴェーユにいう〈思惟〉と〈行動〉の関係は以前と相違してくる。学生時代以降の10数年間の彼女は例の、学生時代以上に労働運動に参加するだけか、工場体験をしたり、スペイン戦争に従軍したりするなどの「動の行動」を起こさずにいない〈行動〉を〈思惟〉に先行させていたし、諸〈行動〉を経験したうえで、龐大な量にのぼる批評（作品）を残す〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉が可能になったからである。しからば何ゆえ〈思惟〉と〈行動〉の関係は逆転せしめられたといえるか。彼女には学士論文において、〈思惟〉と〈行動〉の関係を説く、自らの哲学的主張が、そこに立とうとすれども、現実との接触でどうなるか不明なために、実際に験される必要があった。たとえば工場で、彼女は〈思惟の逃亡〉などを体験した。それは〈行動〉中の一現象である。すると何が〈思惟〉を〈逃亡〉させたかはさておき（筆者は「何が」を〈感受性〉にみる）、彼女の場合、〈行動〉はたんに身体を動かすにあるという、日常で理解される意味ではなくなる。だから彼女はこの解答を得るべく、他の手段として、学生時代より増して先哲や同時代

人の諸思想を読破することになる。だが筆者にすれば、〈行動〉の主たる能力がプラトン思想や東洋（禅）思想とわずかに相似する点を除き、諸思想からは何ら参考にすべき思想が見当たらなかったといわねばならない。要は彼女が継続して諸思想に接したのは、自らの哲学的主張がそこに盛り込まれているかを探り確かめるためであり、それが彼女をして膨大な作品に繋りさせたのは諸思想に対する無数の批評のせいであると読み取る必要がある。

それでは学士論文のデカルト哲学に対する批評もそうみてよいか。批評は人が諸思想に各〈思惟する〉「静の行動」を働きかける〈能動〉能力から、〈受動〉能力としての、何らかの〈思惟〉を導出させる、まさにこの〈思惟〉にはかならないし、この〈思惟〉は諸思想の鵜呑み、思い付きや一人善がりなどから生じるとみるのでなしに、諸思想に学んだうえで、少なくともその賛否を判じるところでの、人の主張になっていなければならないと察知される。けだし彼女の批評はそれよりか、彼女が独自に見出し得た、筆者にいう、自らの哲学を基にした主張にあったといえる。

だからこの哲学的主張によって、ヴェーユに付きまとう、いかなる相貌もふさわしくなくなることが確認される。たとえばここで、彼女が多くの相貌を有したとみられるなか、社会思想家や宗教思想家とされる相貌に的をしぼり語るにしても、それは各主張が成るがゆえの、各相貌であったはずである。要は彼女が先哲や同時代人の諸思想を吸収し、それぞれに見合う批評を加えたからして、これに関係した各相貌が彼女に付されても不思議ではない。にもかかわらず筆者に、社会思想家や宗教思想家を含めた各相貌が似合わない指摘されたはなぜか。彼女が社会思想家や宗教思想家たる各相貌の持主とみなされるはもちろん、社会思想や宗教思想に関する各主張で、個別の思想を成り立たせるからにすぎない。だが彼女が個別の思想を従来の、マルクス思想やキリスト教思想と変わらない主張にとどまるならば、各相貌が付されるにしても、彼女に当てはまるとはいいい難かろう。だからたとえば、社会思想家と呼ばれるにはマルクスと異なる、彼女の主張がこの相貌に見出されていなければなるまい。そうなのだ。そこに特筆すべき主張がみられてこそ、人にこの相貌もありと語られるにちがいない。しかし社会思想家や宗教思想家をはじめとする、さまざまな相貌を人に浮かび上がらせた際の、特筆すべき主張は、各相貌の名を彼女自

らに与えんとする主張ではなく、各相貌たる個別の思想の根に共通に介入していたとする主張にある。こう捉えられる以上、特筆すべき主張とは各相貌をあらゆる個別の思想に、いわば演繹的に用いられた、筆者にいう、哲学的主張であると断じるしかなくなる。

筆者はこの哲学的主張が先哲や同時代人の諸思想の、正否を質す批評をのみか、ヴェーユに付された各相貌を語る個別の思想をも生じさせたと理解する。むしろ、哲学的主張を支柱にした批評が各相貌に相当しよう個別の思想に形成されるといってよいのだが、哲学的主張が個別の思想に、たとえば科学思想に含まれることで、彼女に科学思想家なる相貌さえ宛がうことができる。哲学的主張がかの諸思想に対する各批評すなわち各個別の思想に散見するとされるかぎり、人をして各個別の思想に釣り合った相貌をいくらかでも作り出せるは意外ではなかろう。しかし、彼女がなるほど自らに、何らかの相貌に与さず、何らかの個別の思想を多く作っていたにしろ、そこに哲学的主張を欠かせては、その個別の思想を見出せなくなると捉え得るも確かである。そうなるも筆者は、人が個別の思想に立つ相貌をもって、彼女をあらわしたいとおも願うのであれば、哲学的主張の有無にかかわらず、その人の願いに任せるほかなく、例の、個別の思想やこれに付して語られる相貌にもはや固執する必要がないと、それよりも、哲学的主張が何かを確認することにあるといわねばならない。だがいまだ何らかの相貌に拘る人に指摘せざるを得ないは、彼女のあらゆる、わけでも10数年でものした書き物（作品）にあって、作品間で共通に究明され、展開し深められていく哲学的主張がその人にみえてこないだけか、彼女にかたちづくられよう哲学がないがしろに、置き去りにされてしまうということである。

哲学的主張はすでに学士論文にあらわされていた。学士論文はだから、ヴェーユがデカルト哲学の解明に重ね合わせながら、彼女自身の哲学を打ち出しているも筆者に断じられたわけである。だがそこに語られたは何ゆえ哲学とされるか。彼女は自らが生きていた時代の社会、宗教、科学と教育などのことに、とどのつまり世界（自然）、神と人間のことに終生関心を寄せていたといわれる。しかし子供時代は両親の教育方針から、わけでも事実（現実）に基づいて〈思惟する〉とその〈思惟〉を課すことをアランに教えられた学生時代は、不可知

論に立っていたとみなされるからして、学士論文を書き上げた当時の彼女は、少なからずそこに自身の哲学として、自らを含めた人間がこの世界（自然）の存在やその現実（事実）をいかに認識し、命つきるまでいかに存在できて、生きられるかを問うことにならざるを得ないし、さすれば筆者にとって、彼女のみる、自ら（人間）に可能となる認識論、存在論、実践論や、世界（自然）に可能となる存在論を究明しよう学はもはや哲学を措いてほかにないと思われたのだ。

それに、周知のマルチン・ハイデッガー（あるいはサルトル）が人間における、認識論よりも、存在（実存）論を優先させたと思われるに反し、ヴェーユにあって、最初に明かされるのがなぜ認識論かは、かの哲学的主張である、わけても〈行動〉における〈感受性〉がそこにかかわらねばならないからである。〈感受性〉は身体や〈魂〉の各〈感じる（ressentirやsentir）〉〈能動〉能力での各〈受動〉能力であり、また身体から〈魂〉に、〈魂〉から身体にそれぞれ伝達されるところでの各〈受動〉能力であった。それゆえ〈感受性〉が彼女（人間）における、「知る作用」とそのしくみを述べ語る認識論として取り上げられるは当然である。デカルトにいう〈精神（esprit）〉や〈魂（âme）〉がおのおのをして〈思惟する〉〈能動〉能力とその〈思惟〉なる〈受動〉能力を発揮させる「知る作用」の場と一応みなしおくならば、「知る作用」は彼女の場合、身体の〈感じる（ressentir）〉や〈魂〉の、デカルトのいう〈思惟する〉に与した〈感じる（sentir）〉とその各〈感受性〉との関係をさすことになる。しかも〈感受性〉は彼女が〈思惟〉と〈行動〉と語ったうちの〈行動〉に同意であると筆者にはみえるが、これについてはすでに触れているから⁶⁾、そこに譲る以外にない。ともかくもここは、〈感受性〉たる能力が哲学的主張を代表し、たとえば社会思想や宗教思想のそれぞれに織り込まれていると捉えたにせよ、〈感受性〉はそれ自体では社会思想や宗教思想になり得ないのだから、哲学として、まず先にこの一である認識論によって問われるしかないことに注意するだけで十分である。

ところで今掲げおいた〈感受性〉、哲学（認識論）、社会思想や宗教思想もおのおの、個別の思想であるというまでもない。そしてそこでは〈感受性〉があたかも入れ子的に、要は小さな箱なる〈感受性〉の個別の思想を哲学（認識論）、社会思想や宗教思想の各大きな箱で囲むごとくに、これらの各個別の思想に入

り込んでいると見て取れるのだから、その学士論文に初出した〈感受性〉がこれらの個別の思想に対して、それぞれ必要に応じた展開をみせながらも、共通に見出される能力になると、この能力なしに、ヴェーユに窺われよう哲学（認識論）、社会思想や宗教思想は語れなくなるといわねばならぬわけである。だが学士論文中の〈感受性〉は〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉で書き込まれた語にすぎないがゆえに、それ以後の10数年間は繰返しいうが、一方で、かかる「静の行動」とその〈思惟〉によって、わけても〈感受性〉を、さらに筆者にすれば、この〈感受性〉と相即不離にあるとみえる、世界（自然）の存在やその現実（事実）が何かを、先哲や同時代人の諸思想に聞き出すために当てられたであろうし、他方で、こうした諸思想の書物を博覧強記してさえ、彼女が自ら生きた時代までの、デカルトを筆頭にするいかなる哲学者の、いかなる社会思想家や宗教思想家の諸思想にも、〈感受性〉を見出すことができないと判断しては、学士論文に述べた〈感受性〉をば自ら「動の行動」たる〈行動〉で試す以外、明かす手立てを持ち得なかった期間であったろうと察知される。政治社会に關した労働運動の、女工の、宗教の体験などが〈行動〉であるにはかならない。それゆえこの〈行動〉には〈感受性〉が伴われずにいないと指摘できるだけでなく、誰にも語られなかった〈感受性〉は彼女の独自の用語であると断じておくしかなくなる。

独自と記したは筆者である。筆者がヴェーユの独自さを〈感受性〉にみるならば、〈感受性〉は「入れ子」として、彼女に語られる哲学、社会思想や宗教思想などに組み込められ、各個別の思想をさえ独自にさせずにいないであろう。そこで10数年間での、独自とされる各個別の思想の成立に向けて、彼女の〈思惟〉と〈行動〉は、またこれらの関係はいかにあったかが問われくる。彼女にいう、〈思惟〉は〈能動〉たる〈思惟する〉「静の行動」とその〈受動〉たる〈思惟〉を、〈行動〉は〈能動〉たる〈感じる〉「動の行動」とその〈受動〉たる〈感受性〉を含ませると筆者に捉えられた。なかでも「静の行動」とは彼女にあって、〈脳〉全体をさしていう〈魂〉中の〈精神〉内での、世界の諸対象（物事）に対する働きかけを示すし、その動きだけをもって名付けられた。むろん彼女の「静の行動」には、彼女が先哲や同時代人の諸思想と文化文明論を読んだり、批評したりすること、さらに学士論文をはじめとした、膨大な作品を書いたり、

〈感受性〉と主張したりすることも含まれる。そして「静の行動」とその〈思惟〉の所産である膨大な作品から、彼女独自の哲学、社会思想や宗教思想などが見出せるといった。一方「動の行動」とは、身体の〈感じる〉が世界の諸対象(物事)へ働きかけるとき、およそ〈身体構造に妨害され〉て、〈感受性〉をもたらしにいない、身体自体の〈行動(運動)〉であるし、身体の〈感じる〉とその〈感受性〉は何より生得的な各能力でしかなくなる⁽⁷⁾。身体の〈感受性〉は身体を動かす「動の行動」すなわち〈運動(労働)〉が継続もされるかぎり、〈魂(脳)〉(の血管や神経)に流れ伝わるにちがいない。彼女はこれを、あらゆる人間にとって〈必然性〉の一とみた。この〈必然性〉はさらに、例の工場体験で〈身体構造〉の〈妨害〉以外の〈妨害〉すなわち〈不幸〉に出会わせたのだから、こうした〈不幸〉さえ〈感じる〉とその〈感受性〉として、身体や〈魂〉は引き受けなければならぬことを含意させる⁽⁸⁾。

このように〈魂(脳)〉を含めた身体の〈能動〉たる〈感じる〉と、そこから生み出される〈受動〉たる〈感受性〉は「動の行動」の主役である。この〈魂〉や身体各能力に対する、〈精神〉で〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉なる各能力は以下の通り、相違させて捉えておく必要がある。いずれの能力も人間にとって、〈身体構造に妨害される〉生得的な能力であるのには変わらないが、それでもまず〈思惟する〉は、ヴェーユには〈脳(身体)〉が〈魂〉中の〈精神〉にされてみえるにせよ、〈精神〉だけに生じる能力であることが⁽⁹⁾、そしてとりわけ身体や〈魂〉の各〈感受性〉は〈妨害〉そのものの能力であるの比し、〈思惟〉は〈思惟する〉際、その都度〈妨害〉されては、この〈思惟〉に代えられた、新たな〈思惟〉を次々に求めるべく、〈精神〉で〈思惟(作為)する〉ことが異なる点である。これも〈思惟する〉とその〈思惟〉を課す人間にあって、〈感じる〉とその〈感受性〉と同様に、〈必然性〉の一になる。また〈精神〉がたえず〈思惟(作為)し〉なくてはならないことは考えようによっては、〈不幸〉の一にもみなされる。しかし〈思惟する〉とその〈受動〉にとって〈精神〉とかかわらないとされた〈思惟〉は〈必然性〉や〈不幸〉に出会って、これらを忌避することができようが、〈感じる〉とその〈感受性〉は〈必然性〉や〈不幸〉から逃れることが不可能であるというわけである。さらに彼女にあっては、〈魂(脳)〉のこの〈感じる〉とその〈感受性〉や、〈魂〉中の〈精神〉内での〈思

惟する)働きの同様に、いやそれ以上に、身体の働きたる〈感じる〉とその〈感受性〉のことが重視されなければならないのであった。

さてここからは、ヴェーユにいう〈思惟〉と〈行動〉の関係が何を意図していたかの析出に当てられるが、筆者はこの関係を明かすうえで、以下のごとくこれまで語ったことのまとめからはじめてみる。まず、彼女を含めた人間にとって、〈思惟〉と〈行動〉はそれぞれ日常生活にて働きかけたり、働きかけられたりできる能力であった。次に、彼女は学士論文でこの〈思惟〉と〈行動〉の関係を哲学的主張として取り上げていた時期を契機に、それ以前は〈行動(動の行動)〉よりか、もっぱら〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉によって、いくつかの雑誌投稿論文や学士論文をものしたと察知されるに対し、かの10数年間は哲学的主張を自らに証明さすべく、実際に女工を、従軍を、農業労働をばかりか、ポルトガル、アシジャソレムなどでキリスト教を体験する〈行動〉を課さざるを得なくなる一方、各〈行動〉で自ら確信した哲学的主張(それゆえ筆者は学士論文でのこの主張に間違いがないことが明らかになったと読む)が先哲や同時代人の諸思想に語られてあるかをみつけようとするなかで、自らの哲学を展開させるだけでなしに、彼らの諸思想への、また過去や当代の文化文明への諸批評を記した、膨大な作品を残すはもとより〈思惟する〉とその〈思惟〉によるのであった。そして、筆者には彼女がこの確信を〈思惟〉という能力よりも、いかなる哲学者にも言及されることのない、〈行動〉の主なる能力〈感受性〉にみていたと断じられずにはおれない。

10数年間に及ぶ〈行動(動の行動)〉をもとに試みられた〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉すなわち諸批評は、他の人たちの追随を許さぬ主張となり、ヴェーユの哲学にさえ次に示す点を補強させた。哲学的主張が散見され、しかも彼女をして後日の諸体験にて、その正しさを確信せしめると筆者に指摘された学士論文には、しかし確かに〈思惟〉の語は多数見出されるが、〈行動〉の語は明記されてはいなかった。だから〈行動〉は学士論文以降で補われた語というしかなくなる。さすれば筆者が学士論文に哲学的主張があるとみた、この〈思惟〉と〈行動〉の関係のうち、〈思惟〉はともかくも、〈行動〉の語は見当たらないのだから、こうした関係は語られていないと捉えられよう。だがそうではない。

彼女は学士論文に〈運動〉や〈労働〉の各語⁴⁰を繰返し書き込んでいる。筆者はこの〈運動〉や〈労働〉をば〈行動〉に代えて用いることが可能である。〈運動〉や〈労働〉はそれ自体、誰にも諒解される〈能動〉を意味させるし、〈思惟〉にかかわったり、〈運動〉や〈労働〉すなわち〈行動〉を指し示したりする〈能動〉とはそれぞれ、〈思惟する〉「静の行動」と〈感じる〉「動の行動」であるとともに、〈運動〉や〈労働〉は究極的にいって、〈行動〉だけでなしに、〈思惟〉にも当てはまらねばならぬとみえるわけである。

そして再度いうが、ヴェーユが学士論文を書き上げた時点において、筆者が彼女に、〈思惟〉と〈行動〉の関係が哲学的主張として説かれると判断し、かつこの哲学が仮に完璧に仕上げられていると推し量ったにせよ、彼女にすれば、この関係を現実との接触でいまだ確かめてもいないかぎり（だから彼女は〈行動〉を起こしたのだ）、この関係が自らの哲学を完成せしめていたとは断じられなかった（だから筆者も〈行動〉なくば彼女の哲学を完成させると見て取らなかったのだ）。それでも〈行動〉という補強を得た彼女の哲学は補強の一としての、不可知論的立場にとどまることのない、宗教体験を加えられなければ、哲学自体を証明させはしなかったであろう。すると宗教体験のことは彼女の哲学に与させて理解されねばならなくなる。そう捉える以外に、哲学的主張を10数年間で明証する、この出発点となった学士論文はこうした期間での〈行動〉や、〈行動〉からもたらされる〈思惟〉に繋らず、彼女の哲学とみるにあっても、この一貫性や整合性すら確保できず、いわば何ものでもなくさせる。だがそれは否である。筆者がここにいう、学士論文にみられる哲学（的主張）は彼女の〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉で成立させんとする哲学をさすとみても、そうした〈思惟〉をさらに深めさす〈思惟〉をこの時期に生じさせる必要は毛頭ないし、かの宗教体験たる〈行動〉から得られた〈思惟〉をもこの学士論文の〈思惟〉に加え確かめる必要さえない。要は哲学的主張なる〈思惟〉と〈行動〉の関係が合致されなければ、この関係は保たれはしないにちがいない。だから彼女が学士論文で〈思惟〉と〈行動〉の関係を打ち立てるかぎり、もはや自らの〈思惟〉の産出よりも、実際の〈行動〉が後日に彼女に課せられることになるだけか、学士論文での哲学的主張たる主題提起にあってこそ、彼女の哲学が開始されるといえるがゆえに、筆者には若干21歳で書かれたとされること

もさりながら、学士論文は彼女の全作品のなかでもっとも卓抜した作品に位置づけられると断じられる⁹⁾。

それはともかく、ヴェーユは10数年間で何を確信し得たかである。「動の行動」である工場（女工）体験を例にしていうと、彼女はこの〈行動〉でもたらされよう〈思惟〉が学士論文に記す〈妨害〉を受けるとされるどころか、〈逃亡〉する現実突き当たるのであった。学士論文では〈思惟〉は生得的に〈身体構造〉に〈妨害〉されると書かれていたからして、彼女の〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉で記された〈妨害〉（の語）と同様に、10数年間のうちの、「動の行動」たる一体験にて現実に直面した〈思惟の逃亡〉と書き残す以上は、彼女が〈思惟の逃亡〉をも彼女（人間）にとって〈必然性〉の一であり、〈不幸〉の一であると認めるほかなくなる。〈必然性〉や〈不幸〉と見届けることもまた、彼女の「静の行動」とその〈思惟〉による各語として後日明記されるのだが、しかし筆者にはそれ以前に、彼女が「動の行動」とそこから生み出される〈感受性〉によって、〈必然性〉や〈不幸〉を自らの〈魂〉と身体で体得していたことを、同時に彼女はこの〈必然性〉や〈不幸〉を受け入れざるを得なくさせた、数回の宗教体験をもって、〈必然性〉や〈不幸〉がそれぞれ、世界（自然）の存在やその現実（事実）の証しでしかないことを語りかけると捉えられる。したがって学士論文には、〈妨害〉が〈必然性〉や〈不幸〉の各語で表現されなかったにもかかわらず、〈思惟〉ならびに〈感受性〉における各〈妨害〉は疾うに人間に関した〈必然性〉や〈不幸〉に換言される語に等しく語られるとみておかねばならない。

だから「静の行動」とその〈思惟〉を駆使しての、学士論文に窺える哲学は、ヴェーユがその後の10数年間に亘り、現実との接触を優先させ得る「動の行動」で、例の〈思惟の逃亡〉の事実を補強されたは当然のこと、発展していくと推察可能なわけである。筆者はこの発展の延長線上に、彼女の宗教体験があったとみる。要するに彼女は〈必然性〉や〈不幸〉がなぜ生じるかの答えをば、あの宗教体験から得たということだ。宗教体験から、彼女はこの世界（自然）が、またそこに住まう人間が神によって〈痛ましく愛される〉〈必然性〉で創造されることを体得した。

さすれば不可知論者であったヴェーユは宗教体験でこの現実をも知り得た以上、その立場にとどまるは不可能になろうが、だからといって、たとえば彼女が女工体験後の宗教体験で、社会思想家から突如宗教思想家へと変身したと、あるいは両方の相貌を持ち合わせていたと見て取れるのか。否である。なぜなら彼女が10数年間での「静の行動」とその〈思惟〉にて、「動の行動」をして自らに体得させた、〈必然性〉や〈不幸〉を、宗教思想の語として諸作品に書き残したにしろ、各語が宗教思想で明記されるだけでなしに、社会思想をも自らに生み出す根基であるとみておかねば、おのおのはおよそ根幹を異にする思想になるほかなからうし、〈必然性〉や〈不幸〉の語によって、その各思想の根底が共通するとされるならば、何度も指摘したように、彼女を10数年間の一時期に当てはめる、社会思想家や宗教思想家なる各相貌に見立ておく必要はすでにならうといえるからである。しかも彼女が〈行動〉を優先にさせながらも、自ら体験した〈必然性〉や〈不幸〉を、今度は自らの〈思惟〉にて、ただ筆者には〈行動(体験)〉の時期や場所の違いと映るだけなのだが、これをさして人々の名付ける社会思想や宗教思想の共通項としてか、書き留めんとしたとき、〈必然性〉や〈不幸〉は例の各体験で深められた記述内容になるにしろ、学士論文で〈行動〉に関して彼女に主張されていた〈感受性〉に掃一させられていなければならなかった。〈必然性〉や〈不幸〉が〈感受性〉にかかわることでは、〈必然性〉や〈不幸〉は社会思想や宗教思想で初出する概念ではないことが諒解される。両概念は〈感受性〉の発展が、またこの能力がある証しとしてあらわされる。それに〈感受性〉の方は〈思惟〉で人間に受け取られるのではなく、〈行動〉で実際感じられる能力でなければならない。

なぜか。〈必然性〉や〈不幸〉がヴェーユに「静の行動」とその〈思惟〉で明確に捉えられたは、「動の行動」をもつぱらにした10数年間のなかであったが、しかし彼女がすでに学士論文で、その〈感受性〉もまた〈思惟〉と同様に、〈身体構造〉に〈妨害〉されると記していたことでは、筆者には〈感受性〉が〈妨害〉とかかわる能力と読み取らねばならなくなるし、さらに〈妨害〉は彼女(人間)にとって、生得的な〈必然性〉や〈不幸〉の一とみなされるだけでなく、彼女(人間)の〈魂〉や身体(の血液と神経)を不断より激しく揺さぶって流れ伝わせる〈量〉すなわち〈感受性〉であり、女工体験や宗教体験で、彼女をして〈量

(感受性)を体得せしめられたと察知されるからである。したがって彼女が世界(自然)に接触した際、自らに受け取らずにおれないは、〈魂〉や身体各(妨害)すなわち〈感受性(量)〉であって、彼女(人間)はこの〈感受性〉によって〈妨害〉とどのつまり〈不幸〉になるのではない。〈感受性〉は彼女(人間)に、生得的な〈不幸〉があることを明証させる。それはまさに人間(自然)の〈必然性〉の一にほかならない。

そこで、女工体験や宗教体験が学士論文という哲学的主張のいわば実験であったとみればみるほど、ヴェーユには各体験から、自らの社会思想や宗教思想を打ち立てその各現実(事実)を明かしたこともさりながら、それでも各体験は、彼女が人間の現実(事実)と想定した、かの哲学的主張を踏まえずに、社会や宗教自体を語らせさせはしなくなるのだから、10数年間でさえ、彼女は自らを含める人間を真に生かしめるにはどうすべきかに答えを見出せる機会になるばかりか、いよいよ彼女独自の哲学を完成に導くと捉えられる。これこそ筆者にとって、彼女は「動の行動」をもとにした〈思惟〉で、社会思想や宗教思想を生み出すにせよ、それぞれに依って立つ社会思想家や宗教思想家ではもはやなく、哲学者であるとされるゆえんである。筆者は彼女から、何を措いても、哲学者たる相貌を欠かせてはならず、その哲学の中心に〈感受性〉があることを見定めおかなばならぬ。

「独自」さが〈感受性〉にあったと筆者にいわせるために、この能力がヴェーユのいう社会思想や宗教思想にも書き込まれて、それぞれを「独自」な思想になると見据えさせども、しかし筆者は〈感受性〉が各思想に語られるというにとどまらずに、哲学なる学問(静の行動)でのみか、これを「動の行動」として扱われねば解明されないことを以下で証明する必要がある。別言すると哲学は、また他の学問(科学)さえ、なるほど知識を求め愛することにあるとされるが、そう捉えられるだけでよいかということである。

筆者には、ヴェーユが女工体験や宗教体験の、そしてティボンのもとでの農業労働体験のそれぞれの場を選んだのは偶然か必然か判断しかねるにしても、〈生の現実〉の指針に〈思惟〉と〈行動〉を掲げていた彼女にすれば、女工体験は〈思惟の逃亡〉に遭遇させたからして、身体はむろんのこと、ほかに〈精

神 (esprit) が、宗教体験は主に〈魂 (âme)〉が、農業労働体験は葡萄園で《主の祈り》を朗読しながら、農作業に従事したとのことから、〈魂〉と身体が問題になるであろうと映る。そこからは当然、彼女自身の「静の行動」とその〈思惟〉で、〈精神〉に発する〈思惟〉と身体の動きたる〈行動〉を、そのうえ筆者にすると〈感受性〉を生じさせる〈魂〉と身体を、いかに関係させ得るかを質す「知る作用」すなわち認識論がかたちづくられているとみえるわけである。だから筆者は〈感受性〉がかかわらずにいない認識論が彼女にとって何かと確かめおく必要があるといったのだ。

その際、今度は筆者の「静の行動」とその〈思惟〉において、「独自」と捉える〈感受性〉はヴェーユからみても、先哲のデカルトやマルクスの、同時代人のサルトルやボーヴォワールの諸作品に見出されはしないとみなすにしろ、学士論文で取り上げたデカルト哲学に、政治社会運動参加や女工体験の動因となったマルクスの社会思想に、サルトルを筆頭にした実存主義思想に、またはトマス・アクィナス（もしやドミニクス）以来の正統キリスト教思想に語られていよう各認識論との比較が課せられてくる。そこでは彼らの認識論には見当たらない〈感受性〉が特徴づけられるほか、彼女にいう認識論が彼らのように観念論的に、實在論（唯物論）的にあるのか、はたまたそのいずれであるかどうかだけでも探らねばなるまい。

それをみる前に、ここで筆者は、ヴェーユが〈感受性〉を自らの語として用いたはいかなる契機でか、たとえば、彼女が生徒や学生だった頃から触れ得たであろう、先哲や同時代人の諸思想でか、あるいは医者であった父の助言でか、父所有の医学書を読んでかを問うておく必要がある。すべて否であろう。それならば、〈感受性〉は彼女の思い付きや想像の産物でしかならろうか。これも否である。筆者には、〈感受性〉は医学書におよそ記載されよう「間歇性竇炎」という、彼女が15歳に発作に見舞われ、終生襲われ続けていた「頭痛」に関係すると捉えられねばならぬからである。そのときに生じた「頭痛」以来、彼女は〈感受性〉を発見したといい得る。それは筆者にすると、彼女にとっては〈魂〉である〈脳（身体）〉が〈感受性〉をもたらず「動の行動」を起こさずに、「頭痛」を生じさせないとみえるのだ。かつ「頭痛」は例の〈必然性〉や〈不幸〉の体得を可能にさせるに等しい〈感受性〉なしに生じはしないのだ。

この「頭痛」のことからも、ヴェーユ独自の哲学とは、「静の行動」とその〈思惟〉を含ませていう〈思惟〉の行使で諸作品に述べられた哲学的思想以上に、「動の行動」とその〈感受性〉を含んでいう〈行動〉をさすにあったと認められよう。すなわち彼女に〈わたしは活動を思惟と行動において理解する〉⁴⁴と語らせる〈活動〉のなかで、筆者は彼女が〈活動〉を〈生の現実〉というからには、〈脳（精神）〉内だけの動きたる〈思惟〉よりか、実際に〈脳〉以外の身体の動きたる〈行動〉に従うことを優先させねばならぬとみるところにこそ、彼女の主張する哲学があるであろうということである。10数年間中での、彼女の〈行動〉は女工体験、宗教体験や農業労働体験を可能にさせたばかりか、この各〈行動〉を〈思惟〉をもって明らかにさせたのが社会思想であり、宗教思想であった。たとえば〈必然性〉や〈不幸〉が各思想に記されたことは、〈行動〉で感じられたことの、いわば映し取りであり、現に彼女が〈必然性〉や〈不幸〉に接していたことを明かすことでしかなかった。そのとき彼女に〈必然性〉や〈不幸〉の現実 접촉させ体得させたは何か。それはいわずもがな、〈思惟〉において諸作品に書かれる〈感受性〉ではなしに、〈行動〉における〈感受性〉であった。要するに、筆者は社会思想や宗教思想などとして記された〈感受性〉を女工体験、宗教体験や農業労働体験を実際に可能ならしめる「動の行動」から生み出された、人間的な能力であることをまずは確認する。

そうするとヴェーユ哲学の「独自」さにみた〈感受性〉は世界（自然）にまさに現在働きかけている〈行動（動の行動）〉たる、身体の〈運動（能動）〉からもたらされる〈受動〉能力をさすほかなくなるのだから、彼女の哲学はこうした〈感受性〉を除いては成り立たないと断じおく。つまり信仰さえ組み入れられ得る、彼女の哲学がめざすは〈思惟（知性や理性）〉による哲学（思想）として成るところに立たせるのではなく、「動の行動」とその〈感受性〉によって日々の今を生きんとさせられるところにあり、これがまさしく彼女のねらいたる哲学になる。彼女が独自の社会思想や宗教思想を打ち出すとて、各思想が〈脳（精神）〉を働かせしめるだけの〈思惟（知性や理性）〉にて組み立てられたそれぞれであるかぎり、彼女は人間が救われることはないを見て取った。なぜなら各思想（思惟）で〈必然性〉や〈不幸〉が語られたり、人が各思想（思惟）を観念論的に、实在論（唯物論）的に論じたりみたりしても、〈必然性〉や〈不

幸)が書き込まれた各思想にあつて、何も生じてこないからである。彼女の信仰を織り込んで諸作品に記される哲学が一方にあるほか、本来めざすと察知し得る、彼女の哲学は、人間が実際に身体を動かす〈行動〉とその〈感受性〉において、生きることを現実にさせるにあるとみられる。

キリスト教の伝統的信仰を支える能力と相違させる〈感受性〉こそ、筆者にはヴェーユの信仰の原動力となる能力に見え出す。〈感受性〉は何より女工体験で、彼女に襲いかかった〈思惟の逃亡〉の原因に匹敵するとともに、学士論文に主張していた〈思惟〉と〈行動(感受性)〉の(等位的)関係を崩壊させるがゆえに、彼女の〈魂〉すなわち〈脳〉という身体は〈感受性〉に取って代えられる、要は〈魂〉がすべて〈感受性〉なる能力だけで充滿することにある。さらに筆者の察するに、〈感受性〉が〈量〉的に増せば増すほど、〈魂〉を〈思惟の空無(真空)〉にさせるべく、完璧なる〈魂の破壊〉へと向かわせ、神の創造した、その〈必然性〉や〈不幸〉たる世界(自然)を彼女(人間)に受け入れさせるしかなくなるが、同時にこの〈魂〉をば〈超越的な領域〉への参入を可能にする契機を導かせる能力になる。だから〈思惟〉が〈逃亡〉〈空無(真空)〉となる〈魂〉下の彼女にあつて、〈思惟〉は〈思惟する〉行使を不可能にし、〈思惟〉自身でこの〈必然性〉や〈不幸〉に触れさえさせなくなるは当然とみられる一方で、こうした〈魂の破壊〉をつくり出し、しかもその〈必然性〉や〈不幸〉を感じられる、〈行動〉における〈感受性〉が〈思惟〉に代わって彼女(人間)を救い出すに足る能力として求められる以外になつたと断じられる。かつ〈感受性〉が〈魂〉を〈超越的な領域〉へと誘うことを彼女自らの思想に織り込まずに、その「静の行動」や「動の行動」による彼女の哲学は完成せしめられはしなかつた。

人間の〈魂〉にとって、〈思惟〉が〈逃亡〉し〈空無(真空)〉にさせられるは、〈魂〉なる〈身体構造〉での〈妨害〉以上の〈妨害〉であり、生得的に生じることにあるやもしれない。そのこと自体もまた、人間が〈不幸〉に、〈必然性〉に晒される証しである。これと同様なことに陥らせるは、〈感じる〉という「動の行動」と、そこからもたらされる〈感受性〉であつた。しかしこの〈感受性〉が人間に光となつて差し込む点で、〈思惟〉と異ならせていた。確か

に〈思惟〉は〈妨害〉、〈必然性〉や〈不幸〉などをこのように命名さすだけか、そう命名しても〈思惟〉しないで、これらを〈思惟〉から抹殺もできるが、〈感受性〉は名付け得ない代わりに、これらの受け入れを忌み嫌い拒否することができない。受け入れの否定は人間が動かない（行動しない）ことを意味させる。この〈運動〉を人間自らに課すことはすでに人間の〈必然性〉であり、〈感受性〉はその〈必然性〉たる〈不幸〉を引き受けるに等しい能力となる。これを引き受け（感じ）られる〈感受性〉こそ人間の〈魂〉を〈超越的な領域〉へと運ばせ得るのだ。

筆者は、ヴェーユが女工体験、宗教体験や農業労働体験のなかで、〈感受性〉によって、世界（自然）の〈必然性〉や〈不幸〉を自らの〈魂〉を含めた身体に受け入れさせることは、身体の〈感受性〉たる、〈魂〉を含めた身体の〈運動（動き）〉をして身体（や魂）を〈必然性〉や〈不幸〉たらしめ、もって世界（自然）の〈必然性〉や〈不幸〉と一体にさせられると、こうした世界（自然）と彼女（人間）の〈必然性〉や〈不幸〉を、〈超越的な領域〉に居ます神に由来する真理として愛（信仰）せず、すなわち〈注意力〉⁸³を傾注せずにおれなくなると繰返しおく。だから彼女がいう信仰とは、日常での身体を動かす〈運動（行動）〉なる、〈感じる〉「動の行動」とその〈感受性〉に自ら（身体と魂）を委ねるかぎり、とどのつまり〈思惟〉を〈空無（真空）〉にさせるかぎり、生じくるのであって、何も宗教思想に与させ語られるのではない。たとえばプラトンが信念、いわば愛（信仰）に代えるほどに、哲学は「死の稽古ではないか」⁸⁴とみたと同じく、彼女の信仰も哲学であると捉えられるほかあるまい。されどその哲学はこれも繰返しになるが、プラトンと同様だとて、それが学士論文やそれ以降の諸作品に記されよう、〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉で成る哲学にとどまるだけよりか、まさに〈感じる〉「動の行動」とその〈感受性〉に自ら（身体と魂）を賭して〈必然性〉や〈不幸〉たる現実を生きんとしたところに、彼女の哲学が見出されていなければならなかった。

それに〈感受性〉はヴェーユの場合、〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉によって学士論文をはじめとする諸作品に書き残されていたにせよ、心理学的、生理学的、脳神経学的実験を通しての分析にまで立ち至っていないとみえるために、哲学の領域（分野）にとどめられる。しかもその際彼女の哲学は、これ

もまた繰返しになるが、〈思惟〉と〈行動〉の関係においては、終極〈行動（動の行動）〉に比重が置かれ、その〈感受性〉をもって組み立てられる、現実の認識（論）がすなわち彼女（人間）の存在（論）や実践（論）をさえ含み持つとみなし得たのだから、〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉をさす〈思惟〉たる〈知性（理性）〉を原動力に展開させるに終始する哲学ではあり得なかった。したがって彼女の哲学は例の、デカルトやサルトルの各認識論がこの〈知性（理性）〉から成る〈表象〉を、またマルクスの認識論が〈感覚〉から成る、彼女にいう〈心象〉を取り入れることによって、それぞれ観念論や実在論（唯物論）に見立てられるところの各哲学を意味させはしない。日常の現場で発揮させられる〈感受性〉を主にした認識論はなぜにデカルトの〈精神〉（彼女では〈魂〉）やサルトルとマルクスの「意識」における、各〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉による観念論や実在論（唯物論）を必要とするのか、およそ入り用がないといわねばならないし、わけでもデカルトやマルクスにみられると彼女が指摘するように、各哲学に観念論と実在論（唯物論）を混在させる、〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉にすら依存されはしないのだ。彼女のいう〈魂〉での、こうした〈矛盾〉も、唯一彼女（人間）の、現実の〈感じる〉「動の行動」とその〈感受性〉で解消されるにある。

だからとはいえ、筆者はヴェーユの哲学をフランスは同時代人となるアンリ・ベルグソンと彼の影響下にある哲学者たちにより提唱された、いわゆる《生の哲学（philosophie de la vie）》になるとみてもない。〈生の哲学〉は、彼女の哲学となるほど〈知性（理性）〉ではない〈非理性〉（非合理）的能力をもとにした点で共通してこようが、しかし人間の生得的な、〈魂〉を含めた〈身体構造〉の視点を排除する点で相違する。さらに彼女が10数年間に亘って読み続けた、先哲や同時代人の諸思想や過去と当代の文化文明論に接したり、またはその読み解きと「動の行動」からの現実を絡ませ打ち出したりするとみえる、彼女の社会思想や宗教思想に関し、ここで整理できることは、各思想に「動の行動」で感じられた事実をかの「静の行動」とその〈思惟〉をもって注入させながらも、こうした〈思惟〉を重ねて彼女のめざす哲学をより深め、確認し、かつ完成に導くに役立たせるのを〈思惟〉のねらいにしたからして、自らの各思想の構築を主にめがけることにはあつたのではないし、これをして彼女の哲学の

土台を揺がすに至らしめなかったと推察することにある。

ところがである。このような「静の行動」によるか、それとも「動の行動」によるかはともあれ、筆者はこうした哲学をめぐるとみることでもって、ヴェーユに哲学者の相貌を与えたにしても、彼女本人はおそらくこの相貌が付されることすら否定し去るにちがいない。なぜなら彼女にとって、生きる自体に結びつく哲学は〈感じる〉「動の行動」とその〈感受性〉にしかないといわれる、〈魂〉を含めた身体に根ざす、その動きの哲学でなければならなかったからであり、そうした動き（運動）にある彼女を哲学者と呼ばせるところで、この相貌はいかなる役にも立たぬからである。さすれば彼女の生きた証しを語らせるに、何もことさら哲学と名付ける必要もなくなるのではないか。否である。筆者には、彼女の生きていた時代と現在では異なるし、もとより筆者は彼女自身ではないからして、彼女のその生みの生を、とどのつまり彼女の〈感じる〉「動の行動」とその〈感受性〉を追体験できぬとはいえ、彼女の〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉で諸作品をものしつつ、そのところどころに主張された真理を、今度は彼女と比較にならぬにせよ、筆者なりの〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉にて打ち出しておかねば、彼女のこの「静の行動」で書き残された、生きることでの真理がたとえばどのような「知る作用（認識論）」のもとに獲得されるかさえ不明のままにとどまるだけであろうと察知され得るためである。要はその生きることでの真理に到達せしめよう認識論を知ろうとするかぎり、認識論に関し記される、彼女の「静の行動」を諸作品から拾い上げ問わねばならぬし、それにはこの認識論が哲学に与する以外の、また筆者の「静の行動」による以外の手立てをもって明るみに出されはしないというわけである。そうみると筆者は一方で、今日まで哲学者といわれた人たちとは、彼らの哲学とは何であったのかと聞いてみたくなる。少なからず、彼らは〈魂〉をも身体と捉えること、その「動の行動」とこの動きから生み出される〈感受性〉のことを質しはしなかったのだから。それに対し、彼女にいう、認識論の中核となる能力〈感受性〉がそれ自体をして彼女（人間）を存在させるばかりか、この実践において生きることでの真理に届かせんとする哲学を導かせては、しかもこれまでに提唱されていない哲学であるといえるからこそ、筆者は誰に

はばかりもなく、彼女が彼女独自の哲学を開花させていた哲学者であると断じおくのである。

それなのにヴェーユ自身が哲学者たる相貌を意識することもなく、拘る人でもないと言ったのは、何より〈行動（動の行動）〉に従う人に相貌は無用になる（したがって彼女に付けられた、他のすべての相貌も同様である）と繰返すというほか、彼女がわけても10数年間に亘り〈行動〉に走り続けた生であったれば、〈思惟する〉「静の行動」とその〈思惟〉でもって、彼女独自の哲学をそれとしてまとめ上げる時間があるはずもなかったとも察知されるからである（学生時代に一度言葉を交わし得たポーヴォワールのように、ヴェーユも戦後を生きたならば、そうした時間がみつけれられたかもしれないが）。だが短い生涯のなかで、この時間を活用できたにしろ、彼女は哲学にかかわる思想のみか、他領域（分野）での個別の思想をば覚え書き的に書き残すだけが精一杯のことでしかなく、ましてヤカント哲学の例のごとく、自らの哲学を体系的に見直し整理さすなどはおよそ不可能であったといわねばなるまい。膨大な量にのほり、その多くは未完とならざるを得ないのを知る、彼女の書き物（作品）が時間のなかったことを証しているにちがいない。それでも学士論文では、フランス哲学を代表するデカルトを論じようとするくらいだから、彼に立ち向かわせるには、彼の哲学の批評にとどまらず、批評し得るだけの、彼女独自の思想すなわち〈感受性〉の思想が疾うになければならず、そうした思想を自らの哲学として完成せんがほどに、学生時代から哲学の学問を志し、哲学教師の職に就いてもなお、哲学の探究に努めたは、この第一歩を学士論文に刻み込んだがためとみれば、そこにすでに彼女の哲学があるといえるのであって、もはや彼女にあって戦後の生をはむろん、その後半生（10数年間）の時間を惜しむ思いにかられることもなかったであろう。

それにしても、ヴェーユは筆者にとって、宝物のようにみえる、哲学（生きること）としての真理を、多くの人たちに分かつべく伝えようとして、自らの身を顧みることもなく〈思惟〉と〈行動〉に賭けることができた、稀有の女性であった。

註

- (1) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅰ〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第121輯, 2007年) 註(5)P.40参照
- (2) 拙論「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第108輯, 2002年) 註(2)P.1 (デカルトの用語に倣う) 参照
- (3) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅱ〕」(新潟大学大学院「欧米の言語・社会・文化」研究, 第14号, 2008年) P.P.15-16参照
- (4) 「他の身体」とは、筆者は総じて、ヴェーユにいう〈魂〉をも身体として捉えるのだが、ここでは〈魂〉を除いていう身体をさすことになる。
- (5) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅲ〕」(新潟大学言語文化研究, 第13号, 2008年) P.P.15-20参照
- (6) Ibid. 参照
- (7) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅱ〕」(新潟大学大学院「欧米の言語・社会・文化」研究, 第14号, 2008年) P.P.7-8参照
- (8) Ibid. 参照
- (9) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅰ〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第121輯, 2007年) 註(8)P.53参照 (〈思惟(知性)〉は〈…能動的としてしか何ものでもない〉) 参照
- (10) Ibid. 註(2)P.53その註欄P.65参照
- (11) 他の思想家や哲学者の作品群に、学士論文が加えられているか知るよしもないが、シモーヌ・ヴェーユ研究にとって、少なくとも筆者には、この学士論文を参考にせずに、彼女の哲学が打ち出せないといえる一方、学士論文が彼女の膨大な量にのぼる書き物(作品)のうち、まとまった作品の一であるとみえればなおのこと、そのあらゆる作品に含まれるとした理由に受け止められる。
- (12) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅰ〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第121輯, 2007年) 註(5)P.40参照
- (13) 拙論「ヴェーユ身体論」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第120輯, 2007年) 註(6), 註(7)P.49参照
- (14) Ibid. 註(1)P.26参照